

ゲスト 山口 勝業氏、島田 知保氏、伊藤宏一氏、インベストライフ 岡本和久



前回(2011年2月号)では、伊藤宏一さんから「和風」の九つのポイントを説明していただき、山口勝業さんからは行動ファイナンスから見る「和風」のお話をさせていただきました。それでは、資産運用における「和風」の強みと弱みとは何か。それが今回の大きなテーマです。

「和風」と日本人の性質

岡本 | 和風というのは結局、われわれのDNAがもっている性格とでもいましょうか。私は、国土、気候、そして、長い生活の歴史がそのDNAの基本を形作っているのではないかと思います。とても全部は紹介しきれませんが、たとえば、「おかげさま」という日本独特の言葉があります。われわれを「かげ」で支えてくれている存在に、「お」と「さま」をつけている。われわれはみんな、他のあらゆる人々、あらゆる存在とのご縁で生かされている。それに感謝を込めて言うのが「おかげさま」です。

私は投資にもおかげさまの投資があってもよいと思いますね。つまり、われわれの生活を支えてくれている世界中の国々の様々な産業に感謝を込めて投資をする。このほうが「リスク削減のために国際分散投資をするべきだ」というよりもずっとわかりやすいし、受け入れやすい。長期投資が大切というより、「永代」の心で投資をすればいいといったほうが心にストンと落ちる。投資をするうえではコストが大切というのも「もったいない」という発想で考えれば、その大切さが身にしみてわかる。そして、「知足」の心をもって、そこそこのリターンを狙えばよい。煎じ詰めれば、株式と債券のグローバルなインデックス投信を適正な比率で積み立てればよいということになります。

伊藤 | そうですか。



岡本 | 伊藤さんも山口さんも触れていましたが、やはり、日本人は農耕民族性が強い。これは資産形成には非常に適した性格です。つまり、タネをまかなければどんなにがんばっても絶対に実りはしない。タネをまいて、時間をかけて実りを待つ。これはまさに、長期投資ですよね。狩猟民族だと、森に行つて獲物がなければ帰ってくるより仕方ない。やはり、時間をかけて育てるとするのは日本人の得意とする分野ではないでしょうか。

でもまた、日本人は投資に向かない性格も併せ持っているのも事実です。農耕民族性を例にとれば、やはり、定期的に収穫することを好む。つまり、投資でいえば売却して益を出すか、あるいは配当金や分配金を受け取ることを非常に重視する。その意味では投資リターンを再投資に回して複利で大きく増やすというのは、何か不安感がある。農耕では普通、年に1回は収穫をしますからね。二毛作、三毛作もあり、これは非常にうれしい。それが12毛作になったのが毎月分配型の投信。あの手の投信がすごく受けた背景はこんなところにも理由があるのではないのでしょうか。

山口 | ほかに？

岡本 | そうですね、たとえば、島国に長く住んでいるのでどうしても海外のことにあまり手を出したくないというのがあるでしょう。地続きで自由に移動できる地域の人々と違い、日本人はウチとソトの区別をつけたがる。ウチは安心な場所、ソトは怖い場所。だから、できるだけ外のことには手を染めたくない。これがもしかしたら投資のホームカントリーバイアスを作り出しているのではないかと思います。

伊藤 | 今のお話ですが、「農耕民族」と「島国根性」にはかなり限定が必要だと感じています。「農耕民族」というと、水田での米栽培のイメージが強いのですが、それは弥生時代的把握です。日本は8割が森林で周りには海です。1万年に及ぶ縄文時代には東国のナラ林文化が中心で、木の実の採集やマタギによる狩り、魚や雑穀で生活していた。ですから、水田や畑の耕作をあまり中心的に考えすぎないほうが良いと思います。

たとえば漁業は荒波のリスクとの戦いでした。また海を通してゆるやかに中国大陆とつながっていたのであって、「鎖国」で「島国根性」というイメージは、歴史学会でも訂正されつつあります。アイヌや琉球も含めたアジアに広がる日本のイメージと縄文時代に大陸からやってきた人々が日本に定着したということを考えれば、日本人には元来国際感覚があったのだと思います。



投資に関するホームカントリーバイアスは、むしろ戦後に作り出されたところが大きいのではないのでしょうか。投信の定期分配の感覚は、預金の利息受取や公的年金の受給のイメージと、いわゆる双曲線割引の心理からきているところが大きく、金融教育によって変えることが可能なので、日本人の気質に一般化するのはいかがでしょうかと思います。

ところで、今の話と関係するのですが、江戸時代300年間の最初の100年ぐらいが高度成長経済、当初1200万人ぐらいの人口だったのが新田開発をして3000万人ぐらいになった。それが元禄時代です。そのあと大火事とか、地震とか、飢饉などが起こるようになった。飢饉の話を読んでいると、おカネがいくらあっても米一粒ももらえず、おカネを握り締めて野垂れ死にをしたというようなことが書かれています。やはり、江戸時代だと大火事、地震、飢饉などの災害が脅威で、それに対して今ふうにいえばリスク管理が重要であったわけです。

経済という言葉は経国済民からきていますが、済民というのは民を救うという意味です。つまり、災害があったときに救うのが済民です。ですから、経世家といわれる二宮尊徳などの経済政策通はみな飢饉対策をしていたんですね。普段のときはよいけれど、悪くなると激震がくる。だから、そこをカバーするために手を打っておくことが必要であるという経験知があったのだと思います。

- 岡本 | そういう知恵はあったんでしょうね。いつも悪くなったときのことを考えて少し余裕をもって生活をするというか、備えをしておくというような。
- 山口 | リスク管理と加えて信用ということも非常に重視されていますね。「正直が大切である」ということがいろいろな本などで説かれている。正直が信頼を生む。
- 岡本 | 日本人の怖いものとして「地震・雷・火事・親父」というのがある。地震というのは自然災害というランダムなリスク、雷は季節の循環のなかでのリスク、火事というのはコミュニティに迷惑をかけるというリスク、そして、親父というのは権力を持った人から遠ざけられるリスクです。これはすごく日本人の特質を表していると思いますね。もともと、国土や気候、歴史などにより日本人が共通に持つようになった性格が、江戸時代という比較的外との交流が限定された環境のなかで熟成されていったということがあるのでしょう。それが、「地震・雷・火事・親父」になっている(笑)。
- 伊藤 | そうしたなかで、「自給自足」経済が成立した。
- 岡本 | 原油を輸入していたわけではないし。
- 伊藤 | 自然エネルギーだけ。風力を利用して船が日本を巡っていたのですから。
- 山口 | エネルギーもそうだし、モノも基本的にはすべて農産物ですよ。紙だってそうです。そして、それを回収しているのです。人間の糞尿(ふんにょう)だってそうです。

江戸時代の経済

- 岡本 | 長屋住まいの人の糞尿は大家さんのものとなり、農家の人にそれを売っていた。人口の増加が止まって、糞尿の価格が高騰したということを読んだことがあります。私が子どものころは水洗トイレなんてないですから、汲み取り屋さんが定期的に糞尿を汲み取りにきた。汲み取り屋さんというのは、天秤棒の前後に樽をぶらさげて各戸をまわり、便所の汲み取り口から柄杓(ひしゃく)で汲み取る人です。まあ、ここのお二人はご存知だと思いますが(笑)。



江戸東京博物館の展示物を岡本が撮影

あるとき見ていたら、母が汲み取り屋さんからおカネをもらっているんですね。私は、どうして汲み取ってもらっているのにおカネがもらえるのか不思議で、母にそれを聞いてみた。そうしたら、あれはお百姓さんの肥料になるからおカネをもらえるんだということを言っていました。思い出すとあれは私の経済学の勉強の第一歩だったかもしれない(笑)。まあ、そういう意味では江戸時代の大家さんも経済観念が発達していた。また、農民も肥(こえ)を買うときに需給がひっ迫してくると(笑)。大根などをおまけにつけるなどということもあったようです。

- 山口 | 確かに農民と商人はかなりおカネに対してポジティブな考えを持っていたと思います。むしろ、おカネは汚いものと思っていたのは武士でしょう。武士はおカネでいじめられているから、こりているのかもしれない。それから、職人はあまりおカネのことは言わずに自分の仕事の出来ばえを重視するような気がしますね。いくらおカネをもらったって嫌な仕事はしないという職人氣質ですね。



岡本 | 農民は確におカネの大切さはよく知っていたと思います。ただ、五公五民とか、四公六民といわれるように収穫を税金で取られてしまう。だからできるだけ、「収穫が少ない、苦しい」ということを言い続けていたのではないですかね。今は米がカネになっていますから、とにかくおカネのことはあまり口にしないというのはその名残りかもしれない。

山口 | それはあるでしょうね。

伊藤 | 江戸時代も後半になると商品作物が盛んになって貨幣経済も浸透してきた。大阪では元禄時代に淀屋が出て、米相場で大当たりをして蔵が何百もできた。夏には家の天井をガラス張りにして、そこで金魚を泳がせた。でも、栄耀栄華を極めたその淀屋も三代目で没落してしまった。それを見ていた大阪の商人が、「あんならないように」というのでできたのが懐徳堂だったわけです。義と利を一致させるために勉強が必要だということで作ったのです。学者を呼び、番頭も一緒に勉強をさせた。バブルの反省から、義と利は一致するということを実践しようとした。懐徳堂ができたのを見て幕府も一定のルールのもとで米の先物市場を認めた。その意味では、江戸時代からおカネとの付き合い方というものはできていたのです。



また、二宮尊徳の五常講にしてもおカネは貸してあげる。そして、生活が助かった人は仁義礼智信の仁の心で金利を支払った。お礼というのは道徳です。あくまでお礼で債権法上の利息ではない。このようなことを考えると江戸時代におカネが汚いという意識はそれほどなかったかもしれません。むしろ、明治になってからおカネよりも軍事力のようなのが重視されるようになった。兵隊さんがこの国を守ってくれているというようなね。ですから、江戸時代というよりは、むしろ、近代になっておカネは汚いというような意識が醸成されたのではないのでしょうか。もう一度、江戸時代のことを勉強しなおしてみるとちゃんとした付き合い方もわかる気がしますね。

山口 | 確かに江戸時代にはそれなりのルールがあっておカネが流通していたんでしょう。

岡本 | また、山口さんがおっしゃるように武士階級とその他の身分の人とでは意識がかなり違っていたんでしょうね。

伊藤 | それから、先ほどリスクのことを言いましたが、江戸だったら最大のリスクはやはり火事です。しかし、その火事を「江戸の華」と呼んで、印半纏(しるしばんてん)で粋に火消しが消すという面があったり、燃えてしまったらしょうがないから「また一からやるか」という面もあった。ある意味、すごさもあった。

岡本 | 日本人は確かにランダムなショックが来ると、立ち直りのエネルギーが爆発するようなところがありますよね。

山口 | 明暦の大火で家がみんな焼けてしまった後、ものすごい勢いで建設が始まった。江戸の職人は、ほとんど大工ですからね。火事が起こると彼らは儲かる。宵越しの金は持たないでもまた、そのうち火事があるよというところがあった。

伊藤 | 伊勢神宮の式年遷宮ってありますよね。もともと木でできているから、古くなると神様が宿ってくれない。だから20年たったら作りかえる。これと違うのが法隆寺で、法隆寺は土台を中国風に石にしたんです。だから、ずっと永久に同じ建物が建っているというのは中国文化風なんです。で、燃えてしまったらまた立て直すというのは日本的なのかもしれません。

岡本 | 江戸後期になってゼロ成長時代に突入した。それでも江戸庶民の生活は結構、のんびり、ゆったりと生活をしている。朝から風呂に入ったりしてね。なんかその辺は少し見習いたい感じがしますね。現代人はいつもあくせくしているから。

江戸時代の文化

- 伊藤 | 好きな力士がいて、好きな歌舞伎役者がいて、夕涼みに冷やしたスイカでも食べて、毎日新鮮な魚を食べ、楽しみはたくさんあったと思いますね。江戸時代の後期、フランス革命の前のころですね。あの当時、フランスはバロックではなく、ロココの時代だった。そして、フランス革命の後、新古典主義になった。ロココの時代って装飾性が豊かでカサノバみたいなヤツがいたり、モーツァルトがいてフィガロの結婚とか、コシ・ファン・トッテなど恋愛の話をもとにオペラができたり、庶民の力が増してきていた。日本にはロココ文化はあまり入ってこなかったけど、江戸の後期にはそういうところもあったような気がします。
- 山口 | 江戸庶民に文化や道徳がどのように広まったかに興味があって調べていたんですが、どうも講談が非常に大きな役割を果たしたように思います。梅岩の石門心学なども講釈師が話す。多いときは1000人ぐらい聴衆がいたという話もあります。
- 伊藤 | 石門心学を学ぶ会のようなものが江戸にもたくさんあった。江戸しぐさといわれるようなものも石門心学から始まって広まったものです。
- 山口 | そのような勉強会は全国各地にあった。今の教科書などに登場するのは御用学者などが多いけど、本当に大きな役割を果たしたのは別の人だと思うんですよ。普通の庶民にはもっと違う人が影響を与えていたのだと思いますね。
- 岡本 | 江戸時代の生活を知ると、何か非常にのんびりとしたところがある。しかし、今のわれわれの生活ってすごく追いまわられている感じがするんですね。先日、新聞に仏教系の方が書いていましたが、ツイッターでも、メールでもすぐに返事がくる。インターネットで情報を得ようとするときにすぐ得ることができる。そこで何かの都合で返事や答えが遅れると非常にイライラしたり、不安になったりする。何かわれわれの思考パターンが高速回転に慣らされていて、すべてが短期化している気がするんです。「待つ」ということに対する耐久力がなくなっている。そのあたりも少し、現代人は江戸時代から学ぶことがあるのではないかと思うんですが。
- 山口 | そうですね。ツイッターのように反射神経で反応するのに慣れてしまった。いったん受け取って、咀嚼(そしゃく)してそれから行動をとることが減っていますね。学生の論文などもコピペが多くなっている。コピペを見破るソフトを開発した先生がいるぐらいです(笑)。要するに便利になりすぎてネットで検索すると何でもすぐに出てくる、そしてそれをまるごと信じてしまう。自分で考えるなどという訓練がされていない。
- 岡本 | だから、投資でもすぐに結果を求めたがる。投資の方法も、「要するに何をどうすればいいんですか？」という答えだけを欲しがらる。また、答えが出るまで10年も、20年もかかるということに耐えられない。今までずっとお聞きになってきて、島田さん、何かコメントはどうでしょう。講評というか(笑)。

マニュアル好きな現代人

- 島田 | 今のお話に関連するのですが、現代の若い人を見ていて感じるのはマニュアルを好むということだと思うんですね。若い人と話していると、何冊もビジネス書を読んでいるという人が多いんです。でも、ビジネス書を何冊も読むよりも、一冊を深く読みこんだほうが得られるものが多いと思うのです。だけど、自分でゆっくり考えながら読んでいくことをあまりしない。
- ツイッターでいうと、自分が漠然と思っていることを誰かがつぶやくと、すぐにそれをリツイートする。自分の言葉にして考えないんですね。手軽な解答を求める。そういうなかでブロガーなどが何かを言うと、それをそのまま信じる。あれ、信仰ですよ(笑)。自分で何かをして、それを噛みしめて会得したものではない。手軽に誰かの都合のよい言葉を聞いてきて、それを話し、それで行動する。これさえやっていたら大丈夫みたいな安心感を持っているし、それを求めている。



- 岡本 | そうそう、それは本当に。
- 島田 | これって危険だと思うんです。人それぞれに合うもの、合わないものがあるのに、マニュアル通りにすることで安心感を得ている。
- 岡本 | マニュアル化って、本当にそう思いますね。リーダーシップだとか、プレゼンテーションだとか、話し方だとか、さまざまなセミナーがあってそれに出て、手軽にコツを聞いてきてそれで一丁上がりになっている。だから、若い人のプレゼンテーションを聞くと、みんな同じように聞こえることがすごく多いんです。確かに型を学ぶことは必要だし、「型なし」ではしょうがないけれど、それを自家薬籠中のものにして、さらに型を破る、「型破り」のプレゼンになってやっとな一人前ということなんでしょうけどね。それに気づいていないですよ。ちょっとやり方を聞いてきてそれのできるようになったと思っている。また、その通りやらないと合格しないという恐怖心もあるのかもしれない。時間をかけて自分のスタイルを作る余裕がないみたいですね。
- 山口 | 確かに学ぶことは大切だし、良いことでしょう。江戸時代には農書があって、農業のノウハウが書かれていた。そして、それを読むためにみんなが寺子屋へ行って読み書きを学んだ。要するにマニュアルを学ぶための努力をしたわけです。ただし、この地域の特産物は何かということになると、それはマニュアルにはでていない。つまり、マニュアルを越えることが必要になる。
- 岡本 | ハンバーガー屋のお姉さんがマニュアル通り接客をしているけど、それを5年、10年続けていると本当に素晴らしいサービスになるか、それは疑問ですよ。
- 島田 | だから、お手本になるものの質が重要ということですよ。
- 伊藤 | やはり、身体で会得するということでしょう。いろいろやってみて、やっぱり少し違うとか、こうやったらうまくいったという試行錯誤でよいもの到達していくのが本当でしょう。でも、人間関係が希薄になっているので、お互いに同じパターンでいくことになるのかなと思いますね。
- 山口 | 「学ぶ」は「真似ぶ」からきているといわれるけど、師匠のやり方を見ながら、それをまねして学んでいくというチャンスが減っているのかも知れない。どんなに細かく書いても日本の職人芸的な工業製品はできないでしょう。
- 島田 | 茶道を教えていても、一通りできるようになってからの、その先が重要なんですよ。空間を共有するなどということですよ。でも、順番を覚えるとそれのできるようになったらと思うってしまう。



- 伊藤 | 最近、気に入っているのは、六波羅蜜ということ。これは修行の倫理だといわれます。六つの項目がありますが、まず、布施、人に与える。二つ目が自戒、節制して心身を清浄にする。三つ目が忍辱、耐える、忍耐する。そして、精進、コツコツと努力する、禅定、特定の対象に心を集中して、散乱する心を安定させる。最後が智慧、知恵を働かせる。これらはたぶん、運用の世界でも共通のものではないかと思えます。
- 山口 | 解脱ができる(笑)。

岡本 | 八正道*なども同じですよ。結局、ただ金儲けすればいいというのではない投資というものもありますし、また、その投資で得た資金をただ、贅沢だけをするというのでもない。もう少し、われわれの心が本当に喜ぶようなおカネとの付き合い方というのがあってもいいように思いますね。これは個人投資家の大きな特権ですね。

われわれは世界中の人々とのかかわりの中で生かされている。さらに、地球という環境のなかで生かされている。おカネのことを深く考えると、しみじみと「ご縁」ということを感じます。みんな、お互いに支え、支えられて生きている。そのご縁は世界中に広がっている。一方、投資は、結局、時間とどう付き合うかということです。「生き方」ということでもできると思います。つまり、おカネで意識の空間を広げ、投資で意識の時間的な広がりを得ることができる。おカネと投資を合わせて、われわれは意識の時空を広げることができるのです。資産運用は、時間をかけて「育てる」ものですから、その意味では、若い人にもぜひ、始めてもらい人格形成に役立ててもらいたいですよね。それが、社会・経済のためにもなるし、将来の自分のためになる。

伊藤 | 本当にそうです。

岡本 | 日本は四季がはっきりしていてそれが巡ってきます。まさに、「冬来たりなば春遠からじ」で悪い環境が生じても、じっと耐えていればいつか必ずよくなる。これは、悪くすると「根拠なき楽観」を生むこととなります。構造変化が起こり、循環が崩れていても、じっと我慢していればいつかよくなると思いがちなのです。日本の社会・経済構造は大きく構造変化を起こしました。ですから、いまが冬の状態だとしても、じっと待っていても春にはなりません。和風をもう一度、見直してその強みを生かし、弱みを克服して投資することで、少しでも多くの方が、それぞれの人の本当の心が喜ぶ投資を始めてくださることを願っています。われわれの「和風」見直しの活動がその手助けになればと思います。今日は貴重なご意見を長時間ありがとうございました。

※八正道とは、釈迦が最初の説法において説いたとされる、涅槃に至る修行の基本となる、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念および正定の、8種の徳。「八聖道」とも「八支正道」とも言うが、俱舍論では「八聖道支」としている。この「道」が偏蛇を離れているので正道といい、聖者の「道」であるから聖道(aaryaamaarga)という。(Wikipediaより)